

細雪

映画文学人生論

原作：谷崎潤一郎（1942-48）「中央公論」

監督：市川崑

出演：榎岡鶴子

榎岡幸子

榎岡雪子

榎岡妙子

岸恵子

佐久間良子

吉永小百合

古手川祐子

脚本：市川崑 日高眞也

撮影：長谷川清

音楽：大川新之助

榎岡辰雄 伊丹十三

榎岡貞之助 石坂浩二

あの国は今に共産主義になってしまおうの
でしようか

谷崎潤一郎の作風は耽美主義あるいは悪魔主義
といわれる。「思想がない」という批判もある。

しかし、代表作の『細雪』は大阪・船場の榎岡
家四姉妹をめぐる昭和初期の市民生活を描いた
もので、それほど耽美的、悪魔的な要素が濃厚な
作品ではなさそうだ。

といっても、新潮文庫で九三二ページの長編を
いざ読むとなると、それなりの覚悟をしなければ
ならない。私も長い間、敬遠していたが、市川崑
監督の映画を観た後に、ようやく読了した。

小説の筋は、何度も見合いをする榎岡家の三女
雪子の婚約がまとまるまでの家庭の事情が中心だ
が、「思想がない」ともいえない。

「あなた方、支那はどうなると思いますか。あ
の国は今に共産主義になってしまうのではない
でしょうか」と、白系露西亞人のキリレンコが榎
岡家の人々に尋ねる場面がある。「あなた方、蔣
介石をどう思いますか」とウロンスキーも聞く。

「去年の十二月、西安であったこと、どう思いま
すか。張学良、蔣介石を捕虜にしましたね。けれ
ども助けました。それ、どういう訳？」。

こんなセリフがさりげないかたちで日常会話に
ふくまれている。西安で張学良がやったこととは
国共合作、幕末の日本で坂本龍馬が薩長連合では
たした役割に似ている。



細雪

映画文学人生論

昭和十七年秋、「中央公論」に連載がはじまったが、翌年、「内容が戦時にそぐわない」として軍部が掲載を止めた。谷崎はやむをえず私家版を作り、知人に配ったが、その印刷・配布も禁止されたという。昭和二十三年にやっと完成した。

映画では国際政治の動向を話題にするような会話は無い。雪子の縁談話を中心に、四季折々の美しい風物を織り交ぜてドラマが進行し、最後に雪子(吉永小百合)と華族の息子との婚約がめでたくきまる。「あの人、ねばらはったなあ」と次女幸子(佐久間良子)がいうと、「ねばりがいがあったなあ」と長女鶴子(岸恵子)が応じる。

そして、次女幸子の夫の貞之助(石坂浩二)は料亭で酒杯を傾け、「毒でもあおりたい気や、あれが嫁にゆくんや」とつぶやく。それに対して、「お嬢さんなことあれしまへんな。旦那さん、まだ若いし」と女将が言っても、聞こえない様子。涙をながしながら嵯峨の花見の回想にふける。

映画のラストシーンは市川監督の妻の和田夏十が書いたというが、原作とはまったく違う。映画では、東京に転勤することになった鶴子夫妻を雪子たちが大阪駅で見送るところで終わるが、原作は婚約が決まった雪子が大阪から東京へ向かう車中の描写が結末だ。「下痢はどうとうその日も止まらず、汽車に乗ってからも続いていた」。

下痢止まらずみぞれとなりぬ細雪